

名古屋大学年代測定資料研究センター発足初の業績報告書(Ⅱ)
刊行にあたって

名古屋大学

年代測定資料研究センター

センター長 中井 信之

タンデトロン加速器質量分析計が、名古屋大学アイソトープ総合センターに組み立てが完了したのは、もう9年も前の1982年3月のことであった。その後、 ^{14}C 測定の専用装置としてのビームテスト、精度向上の努力が重ねられ、平行して試料調製装置の作製と検討を続けた。そして、飯島宗一前名古屋大学学長ならびに経理部長をはじめ事務官の皆さんの御尽力により、1985年5月にはクリーンルームを備えた試料調製実験棟が増築され、その中に試料調製システムも完成した。この間も、学内外の要望にも応じ共同研究の形で ^{14}C の測定を続けてきた。

1987年1月になって、正式に学内共同利用が開始され、天然放射能測定利用委員会と技術小委員会が組織された。そして、測定能力以上の利用申し込みに悲鳴をあげる状態になった。1988年3月には、「名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(Ⅰ)」(Summaries of Researches Using AMS at Nagoya University)が発刊され、17編の学際的共同利用の成果が発表された。また、早川幸男名古屋大学学長や山口嘉夫前物理学会会長の御支援により、1988年3月9日～10日の両日にわたって、「アイソトープを利用する年代測定の精密化について」の加速器年代測定に関する研究会がアイソトープ総合センター本館講義室で開催された。そして、その成果として9編の論文をまとめた冊子(文部省科学研究費・重点領域研究(Ⅰ)「太陽の起源」63611001報告集)を刊行した。

このように、放射性炭素の高感度測定と年代測定の学際的な共同利用が着々と進められる中で、タンデトロン加速器年代測定施設を独立部局として充実させることを常に考えていた。国立の機関に部局として「年代測定」の名を掲げた施設は皆無であり(施設内の部門としては存在した)、タンデトロン加速器技術の特色を活かして年代測定の施設を認めてもらう好機とも考えていた。1987年暮れ、諏訪兼位理学部長に私の構想を打ち明けた。早川幸男学長にも相談し、独立施設の設立へ向かってスタートをきった。

当時、タンデトロン加速器年代測定施設は、地学・農学・地理・環境・歴史・考古・人類等の研究・教育に、広く学際的共同利用が行なわれていた。一方、古川資料館も、施設として公式に認定されてはいなかったが[1964年に古川為三郎、志ま夫人の篤志により寄贈され、名古屋大学中央図書館として親しまれ、1982年に古川資料館となった]、タンデトロン加速器年代測定施設と同じく広い文・理系の資料の研究や収蔵物の展示を行なっていたし、年代とも密接な関連を持つものであった。しかし、文部省には大学に博物館や資料館の設置方針はなかった。これらの事実をふまえ、早川

幸男学長、諏訪兼位理学部長、内田弘保事務局長等の示唆もあり、古川資料館をとり込んだ年代測定資料研究センターの構想がもちあがた。そして、1990年（平成2年）6月8日に「名古屋大学年代測定資料研究センター（Dating and Materials Research Center）」が正式に発足し、6月30日に開所披露の会が開かれた。この披露の会には、本センター設立にご尽力頂いた文部省学術国際局の佐々木正峰研究機関課長、古川総合研究資料館を寄贈頂いた古川為三郎氏のご出席を賜った。

このようにして、年代測定資料研究センター設立後、ここに初めての業績報告書「名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（Ⅱ）」を出版することとなった。執筆頂いた著者の皆様に厚く御礼申し上げると同時に、今後とも益々タンデントロン加速器質量分析施設の有効な利用の実を挙げられんことを願います。また、本施設の運営に関しましても、ご理解とご助力をお願い致します。

新研究センター発足にあたって、ご援助、ご尽力頂いた皆様に厚く御礼申し上げると共に、ここまで年代測定施設を育てあげて頂いたアイソトープ総合センターの歴代センター長をはじめ職員の皆様に心から感謝いたします。また、本研究センターは現在の放射性炭素年代測定にとどまらず、幅広い年代測定への道を歩んで行く計画でありますので、今後ともご支援の程お願い申し上げます。

尚、本研究センターでは、今年度は「名古屋大学加速器質量分析計業績報告書」のほかに、古川総合研究資料館関係の「名古屋大学古川総合研究資料館報告（第六号）」も刊行することになっている。

1990年12月